

高千穂・阿蘇

— 神道文化会総合学術調査報告 —

牧 健 二

財団法人神道文化会（会長富川宗徳氏）では、昭和三十一年の七月二五日から八月七日にかけて、宮崎県西臼杵郡高千穂町並に五ヶ瀬川流域一帯の地区と、それに隣接する熊本県阿蘇郡高森町一宮町並に小国町一帯の地区とにおいて、学会各方面の協力のもとに学術調査を行うた。ここに紹介する同文化会発行の『高千穂・阿蘇』は、

この時の実地における調査及びそれと深い関係のある調査や研究を

総合して作製された報告書である。この実地学術調査は三十余名の団員から成り、早稲田大学教授滝川政次郎氏を団長とした。滝川氏は「歴史は足で書け」の標語のもとに、先に島田正郎・駒井和愛・安藤更正の三博士と共に、地方史研究所を設立し、既に各地で総合学術調査を行っていたから、この研究所の所員を高千穂・阿蘇調査団に参加せしめると共に、現地に深い関係をもつ九州大学・熊本大学・高千穂高等学校の教授、宮崎県内の郷土史家等の参加を乞うて所期の目的の達成を期した。考古・宗教・民家・言語・芸能・美術史・文献の七部を立て、考古班は東京大学教授駒井和愛氏が、宗教班は熊本大学教授原田徹明氏が、民俗班は民家・言語・芸能の三者

を含めて一班とし早稲田大学教授今和次郎氏が、美術史・文献班は早稲田大学教授安藤更生氏が、それぞれその班の班長となつた。調査団の本部及び各班の現地における活動の状況は、本書の初に載せられた日誌によつて知ることができよう。

本書は初に団長滝川博士の高千穂研究の意義に関する総論を掲げ、次に各論的研究として考古班以下各班の調査報告を載せている。高千穂は古来皇祖発祥の地と伝えられ、従つて日本民族の国家形成の故郷として知られ来たつたが、戦後は記・紀に見える国家起源史の否定となり、高千穂のことなどは見向きもされないようになった。神道文化会が高千穂・阿蘇の実地学術調査を行うた目的が、高千穂を中心とする上代の遺跡や古文化を広く探査して、この地方に対する認識を新たにし、できれば日本の国家起源における高千穂の宮の問題を究明したいということに存したことはいうまでもないことであらう。

総論的性質を有する滝川博士の論文は、「神武天皇の東征と高千穂宮」と題し、五〇頁に及ぶ長篇である。その要旨の記述及び之に對する管見の発表は、各班の報告を紹介した後にゆずり、ここに述べないが、日本國家の基礎を定めた神武天皇は、日向國西臼杵郡高千穂町（三田井）にあつた高千穂政權より発して東征し、大和において新國家の君主となつたのであり、それは、西暦一世紀のことであるとみている点で、年代的には那珂博士系の学説とほぼ一致するが、戦後の史学に對する批判を交えて法制史的觀點に立つ新説を發表されたものである。

考古班の調査報告は、駒井和愛氏外三氏の分担執筆である。班長

駒井博士は高千穂と小国とにおける調査の経過を述べた後、氏の觀察の要旨をあげる。高千穂では縄文式土器の末期に属すると考えられていたものがあり、弥生式土器のうちでは初期のものが少なく、古墳では横穴のように末期のものが盛行していることから考えると、交通の要路に当つた高千穂への文化の伝播は波状的であると説く。次に阿蘇の盆地には弥生式関係の発見がないが、盆地の周辺には幾多の古墳がならんでいることを注意し、阿蘇噴火口の湖面が乾いて、水田が営まれ墳墓が築かれるようになったのは、原史時代からであろうと説く。更に三世紀の耶馬台国の女王の時代には、熊本から宮崎、鹿児島諸島の地方は必ずしも統合されておらず、大陸からの舶来品が西から東へと移入されたように、その頃の人達のうちにも西から東へ移動したものがあつたことが、大和朝廷の起りを、後になつて征服した熊襲の国、日向と名づけた地方の如き西方に求めようとする動機を成したのかも知れぬと説く。また氏がこれまで宮崎・鹿児島・熊本の三県へ何度か旅行したうちで、最も遺跡に富んでいるのは宮崎県の妻、いまの西都町の付近であるという。そして本書には妻における駒井氏のかつての発掘に関する報告が付載されているのである。考古班の各説の中では、高千穂の先史文化に関しては乙益氏は、隣接地域で育つた文化はたえずこの地に流入したが、この地で独自の文化を作りだすほどの文化の成長はなかつたと述べ、その原史文化について吉田氏は、高千穂に墳丘ある古墳があつたとしても問題にならず、横穴こそは高千穂の古墳の特色であるが、それらは後期の終りに近いものが多いと述べている。更に考古班は進んで、熊本県出土の銅矛銅戈の約三分の一が発見されたという小国

盆地に入り、小国中学校の構内で二つの弥生式住居址を発掘したので、その堅穴や遺物に関する説明を載せている。

宗教班の調査は、班長原田敏明氏が総説を書き、杉本氏が修験道を、岡田氏が高智保皇神を、桜井氏が阿蘇神社の祭祀形態を、宮地治邦氏が宮原両神社の祭祀を報告している。原田教授の叙述は一般的な史的考察であり、特に阿蘇神社の祭祀を重視する。各論では高知保皇神について、この名を有する日向の古い神社は、どの地点の神を指したのであるかについて、詳しい考証の結果、臼杵郡智保郷の神がそれであることを断定され、修験道については、宇佐祠宮四家の一たる大神氏の流をうける三田井の大賀氏を中心として、山臥修験の歴史が説かれ、日向の盲僧に関して雞足寺の盲僧支配が詳述される。次に阿蘇山修験の実態を明らかにするための史料として、封建領主と司祭者とを兼ねていた阿蘇大宮司家の近世記録の数多い書冊の存在が紹介されている。また小国地方の念仏踊についても修験道の観点から考察されている。殊に阿蘇神社の祭祀に関しては特に詳細な報告に接する。即ちその年中行事、踏歌節会、春祭、御田植祭に関し、旧社家宮川正也氏所蔵の古記録などを材料に用い、現行の祭式と比較した叙述がなされているのである。最後に宮原両神社というのは、阿蘇山の北の小国郷宮原に鎮座する神社で、同郷の五大社中の第一位に立つ古社であるが、宮地氏はその沿革と年中祭式について述べている。

芸能班の報告は、本田安次・倉林正次・西角井正大の三氏の共同執筆の形式で、高千穂・阿蘇・小国及びその周辺地域における、お神楽・獅子舞・お能・田踊・民謡の類を詳述したものである。お神楽

はひもろぎ（神籬）を設けて神々を勧請し、人々の長寿を希うてたまふり（招魂）たまずめ（鎮魂）の呪術を行う式であつたが、その庭では酒をかもして宴を催うし、芸能の教々を尽した。この神楽には出雲流と伊勢流とがあり、前者は出雲で後者は伊勢でその形を整えたが、別に獅子頭を門毎にまわして除魔招福の祈禱をしてまわる獅子舞を生じた。早く九州にはいつた神楽は出雲流であるが、これに對し或は山伏の祈禱の様式をおりこみ、或は宮中の神楽歌をとりいれ、或は舞樂の要素を採用し、或は古い能の上に重ねて岩戸神樂を移すなどして、地方的な改革がなされているという。芸能班は阿蘇・高千穂・岩戸・都農・吉原の各神社で神樂の実演を見学したので、それらを報告している。神事に關係ある多種多様のこれらの芸能について、その名称、催うされる日時と場所、組織、服裝、舞の姿勢、樂の種類、奏樂の次第、歌詞などが一々細かに挿入入りで説明されている。この班の記事が最も多く一六〇頁に及んでいる。

歴史・言語・民俗に關する調査では、歴史は田中卓氏が阿蘇氏の系圖と歴史とを、言語は吉町義雄氏が方言を、民俗は井之口章次氏が年中行事を、更に今和次郎、加藤角一の両氏が民家についてその構造を、それぞれ分担し研究されている。田中卓博士の歴史に關する研究は「古代阿蘇氏の一考察」と題するものであるが、氏は紀・記・國造本紀・阿蘇系圖などの所伝のあいだに矛盾があり疑問の点が少なくないことを指摘した後、無窮會文庫所藏の異本阿蘇氏系圖は、その中に「評督」という名称を含んでいるので、その内容は古伝を存するものであると論じ、之を材料にして在來の史料と比較對照するという方法によつて、阿蘇氏の本貫・移住・發展の姿を明ら

かならしめることを努められた。之によつて神八井耳命・速瓶玉命・草部吉見命の女・阿蘇都彦・武擬人乃君などが、阿蘇氏系圖において占めるべき位置についての考証がなされている。独創的な研究である。

最後に美術史と文献との報告は班長安藤更生博士の単独執筆であつて、神像・神面・神樂面・鯛口などを一々実物にあつて大きさや形状や出来ばえなどを調べるのはもちろんのこと、銘文あるものは之によつて歴史を調べる。また高千穂町押方賢一郎氏所藏の朝鮮役關係文書類の如き歴史資料についても記されている。豊富な写真が理解を助ける。

付録として先に一言した「宮崎県児湯郡西都市寺原及び寺崎の遺跡」の報告がある。之は過ぐる昭和二三年四月に、駒井和愛、桜井清彦の両氏が行われた寺原と寺崎の両遺跡の発掘調査を行つた時の記録であつて、三一年の神道文化会の調査ではないが、高千穂考古学の参考資料として付載されているのである。寺原では五本のトレンチを造つて調べた結果として、弥生式土器時代の住居跡の存在をたしかめ、妻神社裏手の寺崎では、今見る西都原古墳群が造られた頃の聚落の址を推想したとのことである。

本書の内容の紹介は、拙劣ながらだいたい以上のとおりである。高千穂・阿蘇の両地区における実地調査が、日本の國家起源史の研究に資するところが多いのはもちろんであるが、今日のように古いものが急速に亡びつつある時、神道文化会が神道に關係ある貴重な研究を實地に行つて行ない、資料を集め、それらを公刊されたことの意義は大きいと思う。ただ私にはそれらを適切に紹介批判するだ

けの準備がないのを遺憾とする。私にとつて多少可能なことは神武天皇の東征の史実性の問題であるから、次に滝川博士の総論的論文「神武天皇の東征と高千穂宮」を紹介し所見を述べることにする。

滝川氏のこの論文の重点は、神武天皇の東征は西暦一世紀に行われた歴史的事実であるという断定であつて、那珂通世博士の紀年考以来戦前に行われた旧説に対し、戦後史学の試練を経せしめた後、新に之を肯定して一新説たらしめたところに特色がある。滝川氏によると、戦後における神武天皇の東征の否認は、考古学の過信と国初に關する記紀の所伝を否定する津田博士の余流のまちがつた風潮とによるものである。殊にジャーナリズムがこの傾向を助長するのは、全くけしからぬのであつて、各所に今日の史風に対する反響の熱意をおびた表現を見うける。同氏独自の輕妙尖鋭な文章で書かれているのももちろんである。

神代史に見える日向の襲の高千穂は、日向の西臼杵郡の高千穂に相違ないが、この地は守るに易く攻むるに難い要害の地であつて、弥生式時代にはいと農業が行われ原始国家の成立を見ていた。漢の武帝が設けた北朝鮮の楽浪郡と交通した倭人は、彼地から漢文化を学び、その後一世紀間にすばらしい文化的向上をうけた。倭人の文化は、三世紀の倭人について書いてる魏志の倭人伝などで想像するよりもずっと早くから開けていた。そして高千穂の国では漢文化の影響を受けて政体を変革した。当時諸國一般の風習として、呪術的統治者は世俗的統治者の上に立つていたが、高千穂では俗的統治は父が主宰し、娘をして祭事を行わしめるといふ改革を断行したのである。一世紀の高千穂國について滝川氏はこのような新説を立て

たが、この説は日本人が國をクニといふのは「郡」の漢音クンの転訛で、初め楽浪郡の郡の名を聞いたの由來するといふ新説に結びつけているのである（一九頁）。ところで北九州の海岸地方では、これまた漢武東征の影響により耶馬台國なる氏族連合國家が成立していたので、神武天皇はこの國家の成立に学び、東方の新天地に氏族連合國家の基を開くために賦起したのであるとしてゐる（二二六）。そしてその実年代について種々の方面から考察をめぐらした末、高句麗好太王碑文に見える辛卯の年西暦三九二年を基礎として、応神から神武に至る中間の十三代の天皇の一代を三十年として計算し、三九〇年をさかのぼつた時代に神武天皇の東征が行われたとした（三六）。かくて西暦一世紀に東征があつたものと見て、那珂通世氏の紀年考の示すところと大差のない年代だとしている。

神武天皇の東征に關するこの高千穂國家説は全く前人未発の新説であるが、かように論ずることによつて、氏は第一に高千穂における古墳が横穴であつて、年代的に新らしいといふことは、この地における一世紀の神武天皇の存在の反証にはならぬとする。第二に耶馬台國の位置について滝川氏は九州説をとる者であるが、仮に大和説をとるとしても、三世紀の耶馬台國即ち大和國が、一世紀に日向から起つた英雄によつて立てられた國であることを考古学的な証拠をあげて否定することは不可能であろうと説く。要するに氏の東征史實説は考古学や魏志倭人伝で、輕々に論難さるべき筋合のものではないとするのであつて、殊に魏志倭人伝の如きは倭人を低劣視す先入観で書かれているから、日本上代史の研究上の証拠力は弱いと見てゐるのである。滝川氏は故中山平次郎博士の「考古学上より

見たる神武天皇東征の「実年代」という論文を引いて、西暦一世紀後半の中頃北九州から東征が行われたという考古学者の説をあげているが、決して之を氏の「一世紀東征説」に役立たしめてはいるわけではない。それどころか、氏は神武東征というような歴史上の事件を考古学的証拠をあげて立証するというようなことは元来不可能なことで、考古学者は何等の発言権を有たないことだと論ずる。氏の新説の特色は法史的推断を施したところに存する。氏はクニの語源は粟浪郡の「郡」に由来するという法史的な見方を基礎として高千穂の国を論じ、また前記の如く耶馬台国なる氏族連合国家の成立に学ぶところがあつたという、これもまた法史的な見方の上に立つて神武東征が行われた理由をとくのである。

神武天皇の東征の道筋については、速吸之門の位置について古事記と日本書紀の間に差がある。本居は之を特定の地名と見たので書紀を正としたが、久米邦武氏は之を潮流の急なる水門の義にとつて古事記に従ひ明石海峡を之に当てた。滝川氏は田中卓博士が権根津彦の明石海峡守備の事実をもとにして、久米説を採っているのを正しいとした。進んで大和への侵入の道を熊野にとられたという物語については、東征説話と大和平定説話を連続さすために作られた後世の作為であろうと見て、重視していない。

次に大和における神武天皇の國家建設に関する滝川氏の見解は次の如しである。氏は崇神天皇紀六年の条を本にして、神武東征以前は於いては、大己貴神を祭る氏族が近畿地方の氏族連合國家のスメラミコトであつたが、大和氏三輪氏など大己貴系族の國王の権力が衰えて、近畿地方の氏族連合國家が混亂に陥つた時期に、神武天皇

は九州からこの地方にのりこんで、群雄を平定してその上に君臨したのであると説く。九州からの東征に関しては饒速日命の先例があり、また垂仁紀に見える天日槍の故事において後例があるから、この史実を信じえない者は記紀の読めぬ連中だと評する。また樋口清之博士の説を引いて、大和平野が盆地湖だつた時代の神武の大和平定に関する史跡の位置が、すべて標高五〇米等高線よりも高い位置にあるということは、考古学の見地から考えても、東征物語が決して架空の創作ではない明証であると論ずる。なぜならもし津田説のように奈良時代初期の造作なら、聖蹟の一つや二つは當時既に陸地になつていた大和平野の中央部にあつてもよさうなものだといえるからだとしている。また橿原宮の現位置については、神宮外苑大拡張の時そこから樞の木の根が縄文式及び弥生式の土器と共に多数発見されたことや、この位置の歴史地理的条件の適当なことなどを考察して現位置が適當であるとすると、神武天皇の畝傍山陵については現位置を疑うべきものとしている。要するに滝川博士は神武天皇の高千穂からの東征及び大和の平定について、古事記及び日本書紀の伝えるところを虚偽の造作ではなく、悉くは信じがたきも史実であると断定しているのである。

以上は滝川博士の「神武東征と高千穂宮」の要旨である。戦後わが国史学界では国体の変革に伴い、日本の國家起源の究明のために、以前と異なり自由研究の道が開かれたのみならず、民主主義の原理によつて日本の國家を完成するためには、歴史家はこの國の起源について科学的な研究を行ない、実証的且合理的に日本史を理解するようにしなければならないという、現代日本の強い要請に迫られる

ようになったのである。そうなるとこれまで神話のままで放任されて来た、日本の神代史や神武天皇やその後の国初の歴史などが、根本的に疑いの眼で見直されねばならぬようになってきたのであるが、この困難な問題の解決は日本固有の宗教である神道の解釈に關係し、國家的な神社の有つべき意義についても影響を及ぼさないとはいかないであらう。場合によつては神道と国史学との調和を全く新しい観点に立つて考うべきであるという問題にまで發展するであらう。だから国史家も神道家も之についてよほど慎重に考へねばならないことだと思ふが、もはや国史のどの部分についても、科学的研究を輕んじては国史とはいえない時勢になつたのだから、研究の結果がどうであらうと、国史家は靜かに深く国史の淵源を探つてみることの必要に迫られることになつた。神道文化会が高千穂に向つて科学的研究の歎を入れられたことに對し、私は心からなる敬意を表する。それと共に滝川教授が調査団をひきいて、詳しく現地を調べあげた上で書かれたこの總論的論文についても、その心を以て拝見した次第であり、之によつて学ぶところが少なかつたのであるが、試に私が注文をつけるとすれば、この論文における史料及び論旨の重要な点について多少疑問をおぼえたところがないではないので、次にはそれを書いて私の責を果たしたく思ふ。

第一は史料としての記紀のとり方であるが、滝川氏が記紀の内容を神代史に至るまで、相当高く評価されているのに對し、私は大体同感である。ただ私は氏が、今日津田学説によつて仲哀天皇以前の所伝が史料としての信用性を根本的に疑われている時節であるに拘わらず、この史料の信用性について殆んどなら説明するところな

く、之を確實な根據として利用されていることに對して疑問をいだかざるをえないのである。滝川氏は記紀には三世紀以後書きつがれた帝紀を含んでいると述べられた部分があるから、氏は三世紀には漢字で書かれた原史料が少なかつとも帝紀について存在したと信じていられるのだらうと思ふ。なぜ三世紀といわれるのか、その理由は示されていないし、ことに干支にはふれていられぬけれども、氏が尊重されておる那珂博士の上世紀年考によると、那珂氏は真福寺本古事記の崇神天皇の崩年の注に見える干支の戊寅を基にして、之を二五八年だとされているから、之に基づいて三世紀とされているのはなからうか。そうだとすると、私も滝川氏と感を同じうする点があるが、同時に甚だ所見を異にする所もある。先ず私は詳論は他日にゆするが、この干支は太安万侶が彼の序文の中に「以注」といつた注として最初から付けられていたものであるかどうかは別として、之を無視すべき理由はなく、寧ろ之を含む漢文の原史料があつたはずだと考えるのである。この原史料がどのような形式のもので、その内容がどのようにして後世まで伝えられたかは今後の研究にまたねばならぬが、その内容は古事記のみならず書紀の編述のための史料にもなつたことであらう。思うに最初にこの干支を取めた漢文の記録があり、それはおそらく崇神か垂仁の時代に書き初められたといわざるをえない。戊寅という漢字が二字だけ残るといふ理由はないから、この二字を含んだ漢文の記録が最初にあつて、それが基になつて国初の歴史ができていたのであらう。だからこそ多くの信用してもよきさうな固有名詞と事実とを含んだ古事記や日本書紀が書けたのだらうと思ふ。

併しこの注の信用性については本居氏や津田氏のような有力な反対説もあることだから、それを打破するだけの論拠がなければ、結局水かけ論になるだろうし、今日では否認説の方が有力で水かけ論にもならぬとされているほどである。私は記紀の分析だけではなく、それ以外に魏志の倭人伝を詳しく研究した結果、今日之について確信ある立証ができると思つてゐるが、滝川氏は記紀の信用性の根拠についてどう考えられてゐるのであるのか。氏の論文は相当きびしく戦後の史風を攻撃されてゐられるのだから、記紀の信用性の根拠を示される必要があつたと思つるのである。

次に滝川氏は那珂博士と同様に国初の天皇の治世年数を平均三十年とおかれてゐるけれども、大化以前の治世の確実な天皇について治世年数を調べると、僅かに十二年前後であるから三十年ではその二倍以上である。国初の天皇に限つてそんなに長い治世を続けたと云えるだろうか。神武天皇から崇神天皇に至る間の八代についても疑うべき余地があると思う。この部分だけなら歴史記事がない上に、系図を吟味すると疑がうべき筋が多いからである。それから滝川氏は魏志の倭人伝の史料としての価値をよほど低く扱はれてゐるようだが、私にはそうは思へぬ。魏志でも魏志の主要な種本である魏略でも、三世紀の後半に死んだ学者が同じ三世紀の倭人について書いておる。しかも倭地に赴いた帯方郡の郡使の報告や洛陽に行つた倭の使節の談話などを材料にしているのだから、たとい何程かの偏見や誇張があるとしても、史料としての価値は至つて重たいといわざるをえない。殊に今日のように古墳の発生は三世紀の後半をさかのぼらぬことが明らかにになり、また古墳の発生は直ちに日本の国

家起源につらなるるとまでいわれている時代には、到底之を軽視することはできないと考える。

第二は考古学についてであるが、私もまた滝川氏と共に、考古学は古い時代の文化を語る材料ではあつても、特定の英雄が特定の時代に特定の行動をしたというような特定の事件の考証の爲には、なんらの発言権のないものだと考える。だが文化の程度と社会及び政治の進歩との間には平行関係があるといわざるをえないから、その点に至ると、政治史における考古学の知識をそう低く見積ることはできないであらう。殊に考古学者の側でも近來は歴史関係の判断を以前よりは慎重に行うようになつたようだから、なおさら然りである。それで私は考古学の提供する材料を歴史家がいつそうよく吟味すると共に、それを歴史研究に結びつける方法についていつそう工夫をこらすべきであると思つてゐる。私は滝川氏が神武天皇の東征を否定するにも肯定するにも、伝説の地に行つてその実地を見よと主張されていることには頗る同感である。実は私も高千穂を訪れたことがある。京大の法科を出て大学院の学生であつた頃、指導教授の仁保亀松博士がその頃は最も有力な言論機関であつた雑誌『太陽』に、日本の国家起源に関する一文を発表された後、大正十一年の夏、私をつれて日向の史蹟の訪問をされたことがある。時の知事が仁保先生の友人だつたので、宮崎でも妻でも其他各地でも大いに優遇された。太陽は高く輝いていた。高千穂の三田井へ行つた時の印象は今なお鮮やかである。その時を回想しつつ本書を読むと、日本の国家起源史の研究の容易でないことを痛感するが、実地の探査で大切なものは、何といつても考古学だと考える。

ところで滝川氏の論文を読んだ後、私は考古学的調査の結果をもつと幅広く採用される必要があるはしなかつたかという感想を禁ずることができなかつた。高千穂の古墳が新しいということが、神武東征説の成立を否定する根拠にはならぬという滝川氏の論調には私は同感である。大正二年に西都原の古墳群の調査が行われてからは、神武天皇の東征は問題にされないようになってきているけれども、近畿地方の古墳が発生するまでに東征が行われ、東征の後初めて古墳ができたのであるとする学説にとつては、日向の古墳の年代が新しいことは問題にならないのである。東征が行われた後でも、大和と日向とは遠く隔たつて平時の交通がなかつたのだから、近畿との交通のさかんな北九州に近畿を学んだ古墳が盛んに出来るようになった後でも日向は昔のままにとり残されたので、おびただし数の西都原の古墳が年代的に新しく、九州山脈の中の高千穂のものはそれよりも新しいとしてもならぬ不思議なことではない。だから私はこの点では滝川氏と全く同感なのだが、日本の国家起源を論ずる以上、稲作農業が行われた弥生式文化の遺物遺跡に対しては特に深く注意をむける必要があると考えるので、滝川氏が实地検証を行われた後に高千穂の国家を論ぜられる以上、いつそう深くかの地の弥生式時代について考察される必要があつたのではなからうかと思う。語を換えていうと高千穂においては弥生式時代の文化の痕跡が貧弱であるという事実を重視するべきではなかつたかと思うのである。なるほど滝川氏の言の如く、高千穂は攻むるに難く守るに易い要害の地であるが、この地の特色はそれよりも東と西の交通の要路にあつていてという点に存する。それは本書の考古学の証明するとこ

ろでもあつて、この地は隣接地域で発生した文化がたえず流入した点に特色があり、独自の文化のあとと存在しないと報告されているのである。弥生式時代において山深きこの地に建設的な国家の首府があつたといえるだろうか。考古学を参考にするとき、それに対して果たしてどう答えるべきであろうか。頗る疑問である。私は本書の印象として、それよりも遙に多く、今日の西都市の一部である妻（部方）の地方の考古学的意義を重視せざるをえないのである。この地について駒井博士は、宮崎・熊本・鹿児島島の三県中最も遺跡に富んだ地方であるといひ、殊に弥生式住居址については、その地の寺原で発掘された往年の調査報告を本書の付録として収載されているほどである。この妻こそは高千穂に天降りの後、ニギノミコト（笠沙御前）の故地だとされているほどの土地であるから、この地方こそはいつそう多く考慮されてもよかつたのではないかと思う。私はかの魏志倭人伝に見える投馬国を以てこの妻にあたるかと考え、又この地方を日向時代の神都であろうかと考えている。本書において滝川氏は私が倭人伝の投馬国を以て高千穂の残存政權に擬したと書かれているけれども、それは私がこの『史林』に發表したところと甚だ異なる所がある。私は投馬国を高千穂の残存政權などとは述べていない。私はまず魏志倭人伝に見える投馬国が日向の妻に当ることを考定し、進んでこの妻を根拠として日向の支配を行うた権力者の中から、神武天皇の東征とよばれる遠征を行う英雄が現われたのであつて、その時期は三世紀の後半だろうと論じたのである。なお私は『史林』の拙論で、卑弥呼の次に立つた男王が神武天皇で

はなからうかという疑問をかかげておいたが、今ではそれをすてている。私の有力な論拠のひとつは投馬国の官名が弥々であることと日向系の君主の美称が耳であるということとの音の一致である。

第三は耶馬台国に關係したことであるが、私は滝川氏が国を表わすわが國語のクニは、楽浪郡の「郡」の音クンに由来するという説を立てられているのをおもしろいと思つた。クニの語源については諸説があり今私は自説を有するには至っていないが、仮に滝川氏の説に従うことにし、また一世紀に高千穂に國家があつたとしても、魏志倭人伝に記録された三世紀の九州北部の海岸や平野地方の開化状況と対照して考えると、それよりも二世紀をさかのぼつた時代に九州山脈中の盆地である高千穂において、滝川氏の説かれるクニの觀念を本にし漢の國家思想をとり入れた政體の變革が行われ、祭政分離の端が開かれたと果していえるだろうか。氏の新説の成立については疑いなきをえない。だが魏志倭人伝の史料としての価値については滝川氏は之を相当低級視されているのであるから、問題はむしろこの評價の当否に存するものと思う。次に神武天皇は北方の耶馬台国の氏族連合國家の成立を見て、東方の新天地に氏族連合國家を建設する意圖をいだかれるに至つたという滝川氏の新説についても管見はやや異なるものがある。私は氏の法史的なこの發想に興味を覚えつつも、神武東征が目ざしたものが氏の説の如き連合國家であつたといえるかどうかが頗る疑わしいと思う。第一点は耶馬台国に關してであるが、私は耶馬台国を先年來研究した結果、耶馬台国と女王國とを混同し同視している従来の耶馬台國觀が根本的に誤まつていることを知つた。女王國は倭國ともいわれ諸小國が連合し

て作つた連合國家であつたが、耶馬台國はこの連合國家の一員であつて女王國そのものではなかつた。この國は女王國の首府の所在地であつた点において他の諸國と異なるので有名だが、連合國家そのものを成していたのではない。この点で滝川氏の説に一つの疑問をもつのであるが、今一つの点はこの場合の連合國家を氏族連合國家と名づけてよいかどうかという疑問である。

滝川氏は倭人伝に見える國々を小氏族國家であると見ていられる。だからそれらが連合して作つた國家を氏族連合國家といわれるのも当然であるけれども、それらの國々はいずれも千余戸以上或は千余家以上の戸数を有し、大國は五万戸七万戸に及んだとされている。もちろんこの数字には著るしい誇張があるとしても、相当多数の氏族が集まらぬと、これらの國々のおのおのが成立していたとはいへまいと思う。だから多数の氏族から成つた國という意味でなら氏族國家といえようが、一氏族が氏族村落を成し、一民族が民族國家を成すというような用語法に従えば、これらの國を氏族國家だつたということとはむりだと考える。それで私はむしろこれらの國は多数の氏族をつんでその上に立つ部族の國であつたと見る方がよくないかと思うのである。それならば耶馬台國を盟主とした連合國家もまた、之を部族連合國家と名づけるのを妥當であるといわざるをえない。尤も完全に部族状態にあつた國家はそれより前のまだ諸氏族の結合のゆるいものであつただろうが、倭人伝の諸國は既にその状態を去つて、國王を出だす氏族は固定し、原始國家としての結合も固定していたと思えるから、それを部族國家と規定するのみではもはや適當でないかも知れぬ。それで國王の氏族が固定しているという

点に着目して、その国を氏族国家といい、それらの国々の結合を氏族連合国家とよぶことができるかというに、それは部族国家の稱ひ方以上に困難ではなからうかと考へる。ところでこの問題はひとり倭人伝の国々のみの問題ではない。滝川氏は神武天皇の大和平定以前において、この地方に大己貴系の氏族連合国家が存在し、神武天皇はその王家をたおして新たに彼を中心とする氏族連合国家を建て、そしてこの氏族連合国家の状態が大化改新まで続いたと見ていられるようだが、仮に氏族国家の概念を最後にかかげた特殊な意味のものにしても、この説の如くに論じうるかは疑問だと考へる。私は神武天皇の建国が史実であるとするならば、私が前示の『史林』の旧考で述べたとおり、日本の民族国家がここに始まり、記紀に見える国造県主の制度はこの時に起つたのであると考へる。だから滝川氏のいわれる氏族国家はこの時において原則として亡び、それらの小国（私の表現では部族国家）は大和の天皇の主権によつて左右される国造や県主の支配する、日本の民族国家の国や県に變つていくということの端緒が、この時に開かれたのであり、それが大和における建国の重点であると私は考へている。

私は滝川博士が神武天皇の東征と大和における新国家の建設について、新説を立てられたことに対して敬意を表する。上述の如き私の批判は主として日向における、ことに高千穂における国家や政治に関するものに限られている。その辺のことは私も多少調べており書いたものもあるので、それに従うてつい遠慮のないところを述べた次第であるが、恐らく間違ひの多いことであろう。氏の寛恕を乞い教示を仰ぐものである。神武天皇の大和における新国家の建設に

ついで、氏の教多の卓見によつて啓発されるところがあつた。私はこれからそれを参考にしていつそう勉強しようと思う。

最後に重ねて神道文化会が行われた往年の調査と今回のこの書の出版とに対して敬意を表する。諸氏の労作について私が本文で略記した紹介が要点を失し、又は誤解を犯すようなことになつたようにと祈りつつ擲筆する。

〔附記〕 本書が高千穂研究に與えた最も大きな貢献の一つとして、私は高千穂に近い阿蘇北方の小国盆地の考古学的調査の成果をあげたい。この地方は熊本県出土の銅矛銅文の約三分の一を出しているが、調査団が新に弥生式住居址二箇所を発掘したことは既記のとおりである。筑後川の主流を占めるこの小国地方が北方の文化を吸収して、早くから立派な部族国家を成していたことを疑わぬ。之に比して高千穂は弥生式文化の遺物はあつても見るべきものなく、妻において弥生式住居址を見るとはいへ、日向からは銅器の遺物を見ない有様である。だから管見では高千穂を經由して行われた日向に対する北方文化の浸出の歴史は浅く、妻にあつたと思われる投馬国の如きも、銅器の効用がもはや無くなつた後北方からの植民国家として建設されたのだらうと考へる。

（大判四七六頁 神道文化会発行 定価二、〇〇〇円）